



連載 **金型の未来を  
拓く  
技術者たち**  
02

1973年北海道生まれ。  
1998年に同社に入社し、  
現在製造部設計部長。  
野山を駆け回るのが、  
大好きな子供時代を、  
自然あふれる北海道で過ごす。  
父親の転勤に伴い、  
日本全国を転々とするが、  
最終的には東京に落ち着く。  
趣味は、映画鑑賞と野外での食事。  
野外で食事をすると、  
なぜか食べ物の味が変化することに  
魅せられていたが、最近では  
「寒さが堪えるようになり(笑)」、  
やや足が遠のいている。



各種部品の設計、加工  
キヤムブレイン  
Shimoyama Kiminori

# 下山 王徳

## 型技術

2006年2月号  
Die and Mould Technology  
2006 Vol.23 No.2

世界をリードする  
プレス製技術

日本製鋼所株式会社  
東京都中央区新富1-1-1  
〒100-0001



無限コーティングプレミアムシリーズ

日清工具株式会社

# 未経験、知識ゼロから 社長の右腕へ 「何でもやってやろう」 精神の、 幸福な結実



下山王徳

Shimoyama Kiminori

カムブレイン

今回取材にうかがったカムブレインは、創業が1993年と、この業界では若い会社だ。当初は、金型メーカーのヘルパーならぬ駆け込み寺のようなスタンスで仕事を受けており、精度が高い、短納期、など条件が厳しい製品製造の受け皿になっていた。2001年ごろ景気が最悪だった時期に、同社は自前のハイブリッドな最新設備を武器に、異業種への展開を図る。その際に営業の武器となったのは、インターネットだった。社長が44歳、社員の平均年齢が29歳と非常に若い会社で、30代半ばにして社長の右腕となった下山さんに話を聞いた。

## 仕事に就いた経緯と、志望の動機

下山さんは普通高校を卒業後、いくつかの仕事をを経て9年前に同社に入社した。その時は製造業（モノをつくる仕事）に就くという意識はまるでなく、当時急速に普及しはじめたパソコンやCADの仕事に携わりたいという思いが強かったという。「流行のITとはなんぞ

や(笑)、そういうのも今後のためにちょっとやっておいた方が良いかな」というくらいの気持ちで。当然、金型というものの存在も知らなかったそうだ。

仕事に就いた当初、下山さんは自分が今何をしているのか、ほとんどわからずに仕事をしていたという。一日の半分は製造の現場で働き、あとの半分は「CATIA」などのCADの操作を覚えたり、という日々が続いた。入社時点でパソコンに関する知識はほぼゼロ。その前の仕事が運送の仕事だったこともあり、まったく畑の違う分野への転職だったという。

## この仕事は面白い、下山さんの手ごたえの根拠

「なので、最初は覚えることがとても多く、苦勞がなかったとは言えないのですが、仕事はなんでもそうですが、たいへんだたいへんだと思ったら自分がキツイので、何でも見てやろう、やってやろうという気持ちでした」

この時、下山さんを支えたのは、「この仕事は面白い」という手ごたえだった。下山さんは、この仕事のどこに魅力を感じたのだろうか。

「この仕事は、毎回毎回つくるものが違うためか、マンネリ化しづらいんです。2度とは同じものがない。納品して、次に別の製品をつくるオーダーが来た時には、前回の経験を踏まえて、ここはこうした方がいいんじゃないかと、創意工夫する余地がすごくあります。これはわたしにとっては、とても大きな魅力でした」

けれども、創意工夫をするには、それだけ引き出しの数を多くしなければならない。自分の「こうしたい」を形にするには、経験だけでなく相応の知識が必要になる。その必要性が、下山さんにとっての仕事へのモチベーションに直結した。結果、仕事上より多くの知識を積み重ねていかなければならない、というプレッシャーが、下



## 株式会社カムブレイン

本社所在地 東京都江戸川区上一色1-14-3  
電話 03-5663-2511  
代表取締役 太田 実  
資本金 7,500万円  
会社設立 1993(平成5)年  
従業員数 25名  
営業品目 各種部品の設計、加工



山さんにとっては、自分のやりたいことを可能にするための力に変換されていったという。

### 未経験を歓迎する、社長の人を見る眼力とその背景

さて、技術者としての経験もなく、理科系の知識も皆無だった下山さんを同社が採用したのは、どのような理由からだったのだろうか。

実は、同社の太田社長は商業系の高校を卒業しており、事務職などを経験した後に製造業（金型製作）の世界に入った、という異色の経歴の持ち主なのである。そのせいもあり、下山さんのそれまでの経歴は、社長にとってはまったくどうでもいいことだったという。

下山さんは第一印象がとても良く、それは入社後も変わることはなかった。社長に、下山さんの仕事を訊いた。

「真面目で熱心、これが一番。あと、最近わたしは報告書を手書きで出させているのですが、要所を押さえた報告が几帳面な字で書かれて上がってきます。最近、日本の子供たちの応用力や分析力が落ちているという話を聞きますが、国語力の問題です。彼はそういう点でも、しっかりしていますよ。ま、時々おっちょこちょいもやるんですが(笑)」

また、この仕事に大切なのはセンスと感性だと語る社長は、工業（高専や大学）を出た人材が常に戦力になるとは、一概には言えないともいう。実際、同社の部長の1人は、大学では英米文学を専攻していたそうだ。

### これからの課題と部下に仕事を教えるということ

現在下山さんは設計部に属していることもあり、CADなどを使って設計の仕事に携わっている時間が多い。

ただ、設計と一口に言っても、その内容はかなり多岐にわたるため、オーダーごとに仕事の内容は変化する。

「そこで、先ほども話に出ましたが、創意工夫というか腕の見せ所じゃないですけど、お客さんに喜んでもらえるにはどうしたらいいかと、日々考えています。高効率化を実現できるとリピート率が上がりますので、お客さんの反応は直截に感じることができます。同じお客さんからまた注文がくると、自分の仕事が高く評価されたようですごく嬉しいですし、この仕事をやっていて良かったと思います」

金型がオスメスびたりと重なり合って、揺るぎのない構造となるように、下山さんの仕事とユーザーの思惑が合致する時、そこに強い信頼関係が生まれる。

さて、下山さんご自分の仕事以外に、現在は部下を抱えて彼らの教育にも従事している。その時に下山さんが思うのは、若い世代と自分では、明らかに何かが違うということだ。

「うまく言葉にはできないんですが、なんかニュアンスが違うんですね(笑)。ああやれこうやれという、押し付けられている、と感じるようです。なので、自分で率先してやって見せたり、上から物を言うのではなく相談の形を取ったり、こちらにも創意工夫が必要です(笑)」

9年前、パソコンのバの字も知らずに同社に入社した下山さんは、今や後輩の指導にも工夫を怠らない管理職へと成長した。それも、仕事が「楽しい」と言い切れるメンタリティを持ち続けながら。

天職というものにはどこで出会えるかわからない。今回の下山さんへの取材を通じ、そう強く感じた。下山さんの成功は、これから金型の技術者を目指す人、もしくはまだ天職に出会えていないと感じている多くの人々に、希望を与えるものではないだろうか。

